

87. ワルシャワ歴史地区の復原とその継承に関する研究

- 文化財としての価値をめぐる戦後の議論に着目して -

Study about the reconstruction and the succession of the historic area in Warsaw

- Focusing on the discussion of the value as a cultural heritage after the World War II -

鈴木亮平*、西村幸夫**、窪田亜矢**

Ryohei SUZUKI*, Yukio NISHIMURA**, Aya KUBOTA **

After the World War II, the historic area of Warsaw were reconstructed accurately referring to the materials that had been kept not to be found by the Nazis in the war. In this way, the history of Warsaw was succeeded to. However, Poland has begun to experience many changes for example social system after the war, so our view of the Old Town has changed. In this study, I would like to describe how the Old Town and its memory have been succeeded, by looking at the track of the Old Town in Warsaw after the war, the process of the reconstruction and its design, the transition of the discussion about the reconstruction of the Old Town, and the movement of urban design and the protection of historic heritage in recent Warsaw. The Goal of this study is to consider how we should succeed to the history of the city by such research. I would like to get a suggestion about how to utilize historic space in the city which will be important for urban regeneration.

Keywords: Warsaw, Reconstruction, Preservation of cultural heritages

ワルシャワ、復原、文化財保存

1. 背景と目的

近年、歴史的な空間を都市再生に活かしていくことが、1つの課題として捉えられているが、そういった空間の魅力、必要性は、時代を超えた他者との空間、そして時間の共有を可能にする点にある。それは空間だけでなく、歴史的な空間から触れることのできる過去の時代の意志と密接に関わってくるものである。この意志をも含めた継承が1つ重要となる。そこで、人々の意志が空間に表れた顕著な例の1つである、ワルシャワ歴史地区(5.ならびに図-5により定義)の復原に着目する。不屈の努力によって再生された都市空間とそこにかけた強い意志がどのように継承されたのか、が本研究のテーマとなる。

本論文では、文化財としての都市空間の、空間だけでなくそこに投影された意志をも含めた価値という観点から、研究を進めていく。復原されたワルシャワ歴史地区の文化財としての価値とはどのようなものだったのか、そして復原後にどう受け止められ変わっていったのか、今どう継承されようとしているのか。さらに現代からの視点で捉え、今後の継承のあり方を探ることが本研究の目的である。

2. 本研究の位置付け

既往研究では、そういった現代的視点が欠けており、本研究ではそこに取り組むこととする。日本においてはワルシャワの戦災復興に関する研究、復原の過程に関する研究は行われているが¹⁾²⁾³⁾、現代から見たその意義と今後の継承に関する議論はなされていない。また海外の研究¹⁾においても、復原のプロセスやデザイン、復原された地区の価値やそれをめぐる議論に焦点をあてたものはあるが、歴史地区のこれからのあり方を、現在の保全の動きや都市デザインを含めて大きく論じたものは見当たらない。

3. 構成と進め方

論文の構成は大きく分けて2つあり、前半で復原のプロセス、デザインの実態を把握し、ワルシャワ歴史地区がどういった地区として復原されたのかを記述する。後半部分ではその継承の過程を、歴史地区の文化財としての価値をめぐる議論、そして現在の動きを追うことで明らかにし、それらを踏まえてこれからの歴史地区のあり方を考察する。

文献調査と現地でのヒアリングを基に事実を整理し、考察を行った。過去の出来事に関しては基本的に文献から読み解き、専門家へのヒアリングで補足を行っている。近年の動き、これからの動きに関しては行政の資料を中心に、関係者にヒアリングを行い補足した。

4. ワルシャワの戦災

ワルシャワは第2次世界大戦で、市街地の約85%が瓦礫と化し、100万人以上の命が落とされた³⁾。これは、詳細な調査に基づき文化的価値のある建築物から優先的に破壊していくことで、ワルシャワの民族浄化を進めようとした、ナチスの系統的文化絶滅プログラムによるものである⁴⁾。

その中で、世界での他都市と同様に、戦争という好機を活かした戦後の都市改造の動きが生まれ、秘密裏に専門家による議論がなされていた。それと同時にナチスへの侵略に対する抵抗として、他国に破壊された都市をポーランド独自のスタイルで復原しようという動きが起こった。その準備として、戦時中からワルシャワ工科大学の学生の手によって戦前の建物の図面が作成され、写真や絵画などの資料、装飾品の破片などもナチスの目を盗んで保管されていた²⁾。また、将来の都市の担い手を育てるため、教育活動は戦時中も継続されていた。

長い間他国に支配され、自らの歴史、文化、アイデンティ

*学生会員 東京大学大学院工学系研究科 (The University of Tokyo)

**正会員 東京大学大学院工学系研究科 (The University of Tokyo)

ィティへの強い想いがあることに加え、ナチスの計画的な破壊戦略が、ワルシャワ市民の文化的アイデンティティ奪還への想いをより強大なものにし、そっくりそのまま迅速に都市を復原するというアイデアを生んだと考えられる⁴⁾。復原という行為は、戦災復興の中に見出した、破壊され心理的ダメージを受けた自らの都市にそれでも生きることへの希望であったと言える。

5. ワルシャワ歴史地区の復原

終戦後、戦災復興が始まるが、都市全体としては住宅供給、交通、工業に力が入られ、近代的首都の建設が進められた。CIAMの影響を受け、戦前の劣悪な住環境を改善し、設備や1人あたりの床面積等、近代的水準を満たした住宅団地の建設に加え、主要道路の拡幅、建設により、経済、産業の発展を支える都市交通ネットワークが目指された。ポーランドの産業の中心となる新興工業団地も建設された³⁾。

この動きは、歴史地区の建造物の復原という考えと対立することになる。その中でも共存の道を見つけ進めたことが、歴史地区復原の実現につながった。街並みの復原を可能にしたのは、5つの要因が絡み合ったからだ。ルビアトフスキは述べている。(1)復原と開発の地区の分担、(2)ザヴヴァトヴィッチ、シガーリンといった復原の中心的人物の政治力、(3)社会主義の浸透のためのソ連の方針転換、(4)社会主義への転向に伴う土地の国有化、(5)戦後の資本主義から社会主義への転換期の不安定な政治体制、である⁴⁾。

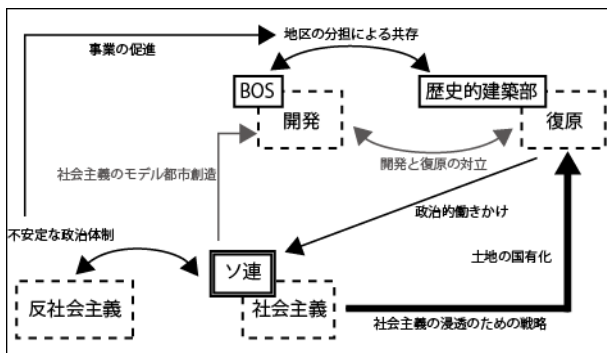


図-1 歴史地区の復原に影響を与えた5つの要因

こういった様々な要因が絡み合った結果、ある歴史的な地区のみ復原が実行された。その地区を本研究では他地区と区別しワルシャワ歴史地区と呼ぶ⁵⁾。復原派と開発派の対立と共存(図-6)の間で、特別な指定や枠組みがない中で、様々な意図が働いて復原された地区である。そこでは、戦時中に作成、保管された資料が取り出され、それに基づいた詳細な復原が行われた。復原には破壊された建物の瓦礫が使用され、多くの市民の手によって瓦礫を収集し組み合わせる作業が行われ、かつてのまちの姿が取り戻された。

忠実に復原されと言われるワルシャワ歴史地区だが、そのデザインの中にはいくつもの工夫が見られる⁶⁾。戦前の姿そのままを復原したのではなく、過去の増改築の中で歴史的に重要な時代と捉えられた17、18世紀のデザインが選択されたり、建物密度を減らし近代的設備を導入するこ



図-2 ワルシャワ歴史地区の位置(破線部内)

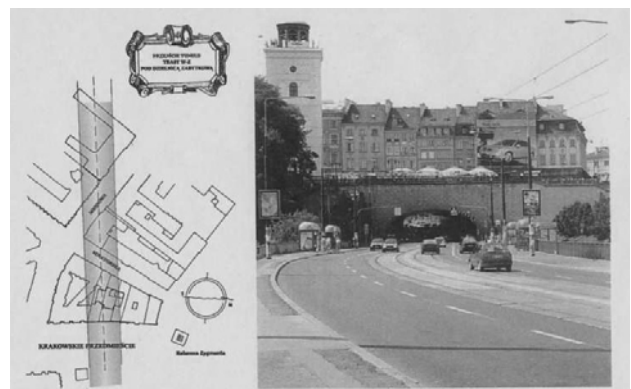


図-3 王宮広場の下を通るトンネル

(出典: Włodzimierz Pela, Andrzej Sołtan et al (2007) p32) ⁵⁾

とで近代的居住環境に合わせたりしている。

まず、旧市街の王宮広場を貫通するように計画されていた主要幹線道路を王宮広場の下にトンネルを建設しそこを通したことで、歴史地区の復原の大きな前提条件を確保している(図-3)。人口が増加する中で建てられていった城壁に接続した建物群を取り除き、本来の城壁の姿を取り戻したことで、この地区の重要な景観を創出している。さらに、この復原の最大の特徴はファサードの忠実な復原であり、一見戦前と全く同じデザインのようなが、よく見ると景観を創出するために屋根のラインを揃えたり、窓や装飾のデザインの統一が図られたり、と工夫がなされている(図-4)。また、あえて手を加えたことがわかるように古い部分が見えるデザインにすることで、歴史の階層性を示すような意図も見られる。

建築内部では戦前の劣悪な居住環境を改善するため、設備や部屋の大きさなどで、大きな改善が行われている。ア

一丁の形状においても、改修する中で、隠されてしまっていた本来のデザインに戻されたものが多い。オープンスペースや住民の動線の確保のために、人口増加の中で増築されてきた街区内部の建物は取り除かれている(図-5)。それ

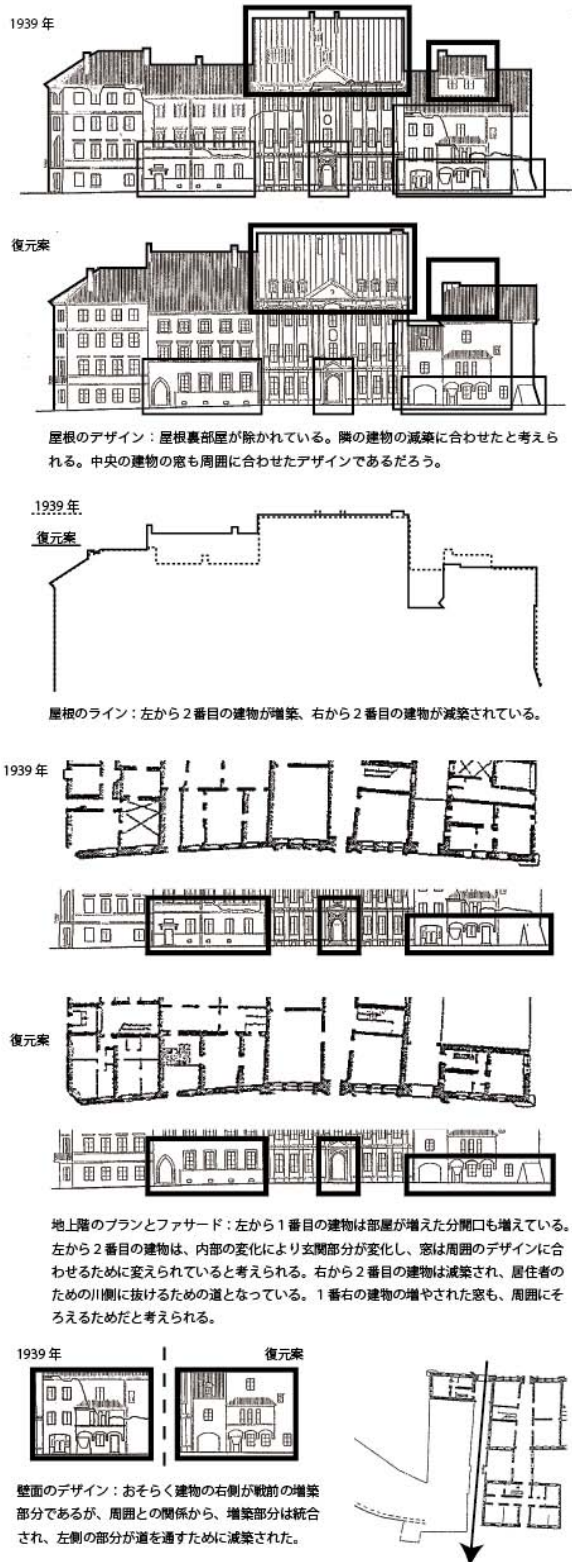


図-4 旧市街イエグツカ通りNo. 8-2の復元
(図面の出典：Jan Zachwatwicz et al(1956))⁶⁾

に伴い教会へのヴィスタといった特徴的な景観を創出する試みも見られる(図-5中矢印)。

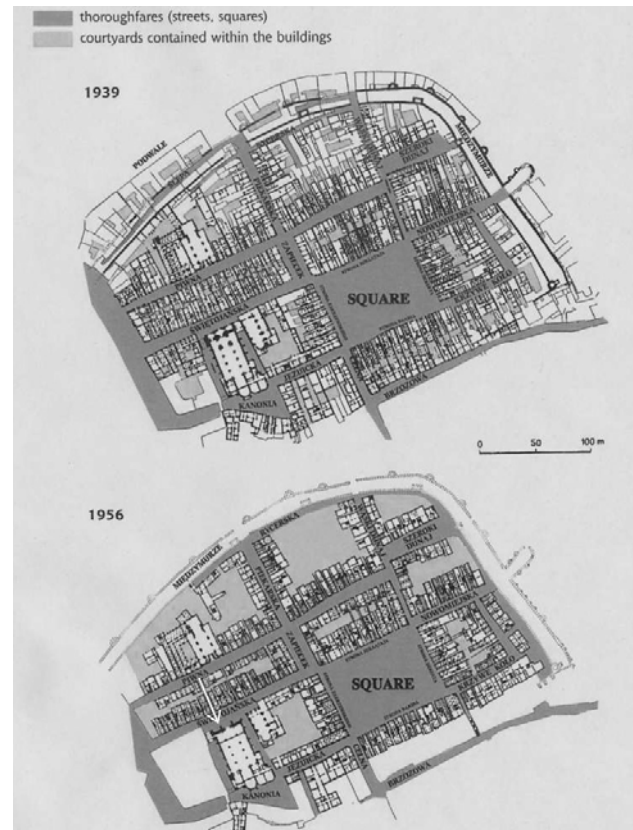


図-5 戦前と戦後の旧市街のオープンスペースの変化
(出典：Włodzimierz Pela, Andrzej Sołtan et al (2007) p17)⁵⁾

近代的首都建設と、文化的アイデンティティの奪還という2つの軸からなる大きな構造の間で、ワルシャワ歴史地区のデザインはなされた。近代的な居住環境の実現、ワルシャワの歴史を伝える文化財の保存、市民に希望を与える都市の再生が目指されたのである。復元されたワルシャワ歴史地区は、戦争で失われた自らの都市の姿を取り戻したいという想い、戦争を乗り越え希望を見出せる新しい都市の姿を作りたいという想い、という2つの強い意志から生まれた、新たなワルシャワの姿と言える。

6. ワルシャワ歴史地区の復元に対する評価の変化

歴史地区の復元をめぐるのは、戦時中からポーランド国内で意見が分かれた。復元をコピーという歴史に不正に手を加える行為として捉えた批判、復元が建築的発展の阻害要因となることへの批判があり、その一方、風景の再生が戦争を経験した市民にとって大きな価値があること、確かな根拠に基づき復元された歴史地区は文化財として十分な価値を有するとの説得力があること、が主張されている⁷⁾。

その後、この議論が世界をも次第に巻き込んでいくのだが、市民の想いという内なるものから生まれた都市空間の価値という、文化財の新たな考え方が世界に投げかけられたのである。1964年のヴェニス憲章では、当時の文化財のオーセンティシティの概念が国際的に共有されたわけだが、

この時点では、オリジナルに手を加えていること、復原に際して個別の建築物ごとに異なる時代を選定していることが、文化財保存に関する当時の概念に反するとされ、ワルシャワの復原は否定的に捉えられている⁸⁾。一方、戦後、政治的理由から25年間許されなかった王宮の復原が、戦後の復原と同様のやり方で開始されたことは、ワルシャワが発信した新たな文化財としての姿が再び具現化されたことを意味する。形が不完全であっても時代の意志を収める器としての価値があれば文化財と呼べるのではないか、というワルシャワの問いかけは、はじめ否定されたものの次第に肯定的に受け止められるようになった。

そして1980年にUNESCOの世界文化遺産に登録されたことによって、普遍的な力を持つ世界で共有されるべき財産として認められた。当時のオーセンティシティの概念にそぐわないことを認識した上で、「都市の再生への国民の意志」「最も重要な文化的環境を守ろうとする意志の象徴」⁹⁾に価値があると申請され、一度は落選するも、2度目の申請で、歴史的地区保存の新たな規範の創造、戦争による破壊と国民の意志の記録、という2点を理由として選定された¹⁰⁾。市民の意志が空間として表れたこと、また詳細な資料に基づいた復原の質の高さが評価されたと言える。

これまでの歴史地区の復原をめぐる議論をみると、(1)オリジナルの価値、(2)時代の選定、(3)普遍性と特殊性、という3つの争点があった。オリジナルの素材・形態への操作と、復原における時代の選定が、オーセンティシティの概念に反している点で否定されていたものの、それとはまた違った新しい文化財としてのあり方が問われ、議論された。破壊された都市の戦後の社会主義政権下での復原という特殊的状況であるが、市民の想いが空間として継承されたという普遍的価値が認められたのである。

世界遺産登録と王宮の復原は、戦争を体験した世代による復原と継承という1つの時代の到達点であると考えられる(図-6)。戦災復興とそれに続く中心地の開発の中で、歴史地区に対してアイデンティティを求める意志が働き、ワルシャワ歴史地区は復原、そして都市空間として継承されていった。戦後すぐ復原と開発の対立が地区の分担によって棲み分けされたのに続き、歴史地区の継承においても、中心市街地の近代化と対立することなく進められたことが大きな背景となっている。しかし、その後戦争経験者が減っていくことに加え、1990年を境に社会体制が大きく変わ

り、新たな世代の新たな継承の時代となったのである。

7. 歴史地区をめぐる新たな継承の動き

新たに迎えた時代の大きな背景としては、歴史地区の観光地化の促進による、観光資源としての魅力の高揚への傾倒、それによる市民の乖離というものが挙げられる。また、その一方で、近年の社会の情報化によって歴史に関する情報へのアクセスが容易になり、さらに歴史に対して自由な主張ができるようになり、市民レベルでの歴史的建造物への関心が高まってきているのも重要な背景である¹¹⁾。

その中で、歴史地区の価値の継承に関わる主体に変化が起きている¹²⁾。歴史地区の復原を主導したワルシャワ市歴史的建築部(図-6)を引き継ぎ、戦後一貫して歴史地区の文化財を管理してきた同市文化財保全局に加え、都市デザイン全体を進める同市都市・建築局、さらには、独自に建築物の開発・改善に努める民間ディベロッパーの3極が、それぞれ違ったスタンスで歴史の継承に取り組んでいる。文化財保全局は戦後に市民が残したまちの姿、そしてそこにある記憶を守ることが重要だと考えている。それに対し、都市・建築局は都市全体の発展の中でアイデンティティを打ち出すための歴史的資源の活用を目指しているし(図-7)、民間ディベロッパーは、独自の開発の中でも歴史地区周辺ではその文脈を汲み取ったデザインを目指すような動きを見せている。

文化財保全局の役割は、歴史地区の歴史と場所の重要性が忘れられないようにすることであり、そのために啓蒙するために必要なものの設置に積極的に取り組んでいる。例えば、詳細な復原に貢献した貴重な資料であるベルナルド・ベロットの風景画をまちに設置したり、青銅でできた旧市街の模型を街角に展示したりしている。

都市・建築局が描く将来像と都市戦略では、誇るべきアイデンティティを有した文化の創造のために、歴史地区を含んだエリアの開発規制がなされ、文化財保全局の目指すところを後押ししている(図-7)。

その一方で、市の新たなシンボルとして計画しているサスキ宮殿の復原では、両者は対立している。都市・建築局は、かつて王が居住していたサスキ宮殿を復原し市庁舎とすることで、ワルシャワの歴史的・文化的アイデンティティを打ち出そうとしている。しかし、歴史地区に隣接する場所での復原は、歴史地区の文化財としての本来の価値を見えにくくしてしまう危険性があると、文化財保全局によって指摘されているのである。

同様に、民間ディベロッパーが計画しているフォクサル通りの建物のファサードの改修も、保全局に反対されている。民間ディベロッパーは、建物の装飾を19世紀のデザインにしようとしているが、文化財保全局は戦前から変わらないそのデザインを継承していくことが重要であると考えている。一方で都市・建築局が打ち出しているカラス宮殿の復原は前向きに検討されている。カラス宮殿が1913年に壊されて以来、その場所は100年間空地のままであり、宮殿

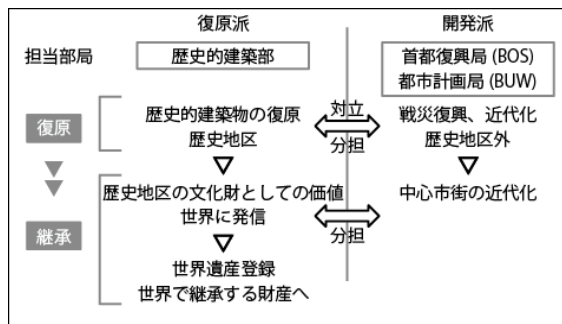


図-6 6章まとめ：歴史地区の復原と継承の1つの到達点

の復原は歴史地区の街並み、連続性を保つ意味があると文化財保全局は考えている。

このように、現代の歴史地区の継承を取り巻く環境は、



- 凡例
- 世界文化遺産に登録された地区
 - monument to historyとして認定された地区
 - 歴史的モニュメントに認定された地区を含め歴史的価値のある地区
 - 歴史的モニュメントに認定された空間軸
 - 歴史的モニュメントに認定された通りと広場
 - 歴史的な通りと広場
 - 台地上の歴史的シルエットを形成する歴史的建造物
 - 歴史的モニュメントに認定された建造物
 - 歴史的モニュメントに認定された考古学的遺跡
 - 歴史的モニュメントに認定された考古学的地区
 - 台地
 - 大きなスケールで景観を構成する空間軸

図-7 歴史地区を含めた文化財保全の戦略

(出典：Municipal Planning Institution Office of Architecture and Spatial Planning(2007) p22) ¹¹⁾

各主体の姿勢の違い、状況に応じた判断の違いによって複雑なものになってきた(図-8)。さらに歴史への関心の高揚による市民の参加が加わり、新たな担い手が出現することで、より複雑な状況になると考えられる。

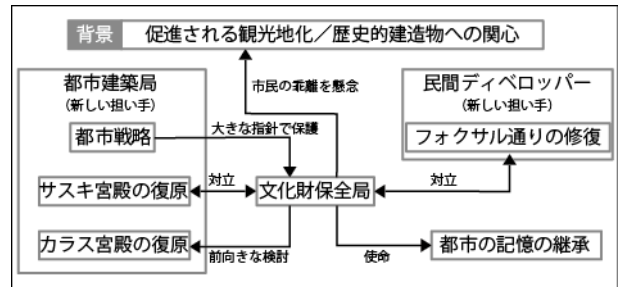


図-8 7章まとめ：歴史地区の保全を取り巻く状況

8. ワルシャワ歴史地区の継承の実態

戦後の復原から現在にかけてのワルシャワ歴史地区を見て、3つのステージがあったと考えられ、最後に仮説を立てることで筆者の主張としたい。戦争を経験した世代による復原とその継承は、社会主義という政治体制の中、ワルシャワ歴史地区に集中して進められ、王宮の復原、世界遺産の登録によってその価値が認められ、1つの到達点に達したと言える。それが第1、第2ステージである。その後、社会体制が大きく変わり、継承に関わる主体の世代交代と多様化、対象とする地域の拡大が起こる。それによって文化財保全局が保ってきたものとは違う意志が生まれ、噛み合わない部分が出てきた。これがこれからの継承における悩ましいポイントの本質と言える(図-9)。

空間と時代の意志に焦点を当てると、第1、第2ステージにおいては、アイデンティティを求める強い意志が、復原的創出、そしてその継承に直接働きかけていたが、現代においては戦後から受け継がれた意志が、継承の担い手の世代が交代する中で、実際にアイデンティティを求める意志よりも、文化財としての価値を守ろうとする意志へと、転換されたと解釈できる。その一方で、サスキ宮殿などの復原のように、歴史地区の歴史を汲み取り、そこに新たに今という時代の価値を加えようとする動きが出てきている。これは今の時代におけるアイデンティティを求める意志と取ることができる。これらは先ほどみたように相容れない面があり、こういった複雑に絡み合う新たな時代の意志と新たな時代の空間をどう構築していくか、これが歴史地区の継承の直面する困難の要因であると考えられる(図-10)。

このような意志は、各主体が歴史地区を継承しようとする姿勢であって、正しいか間違っているかと言う問題ではない。それを踏まえ、どの意志をどこに反映させるのかということが、これから重要な点になる。

また、歴史への姿勢とやはりそこにも自分たちの時代のもの、価値をつけていこうとする動きがあるのは戦後と似たような構造であり、復原された歴史地区の継承においては常に両者が天秤にかけられている。これが歴史地区の継承における大きな構造であると言える。

さらに、かつての記憶が薄れていくのは当然であり、記憶を継承しようとする啓蒙的な取り組みは必要だが、記憶と結びついた都市空間を継承するために、実空間への操作も議論していかななくてはならない。

以上の3つが現在のワルシャワ歴史地区の継承の実態であり、今後議論していかななくてはならないものである。

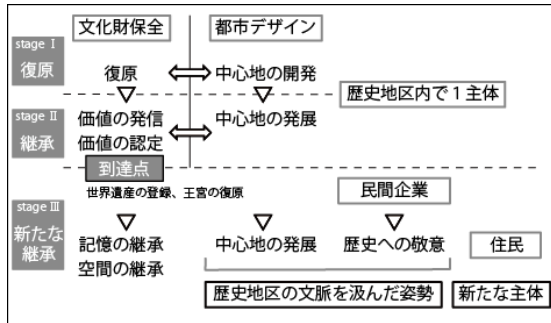


図-9 歴史の継承における主体の狙いと動きの変化

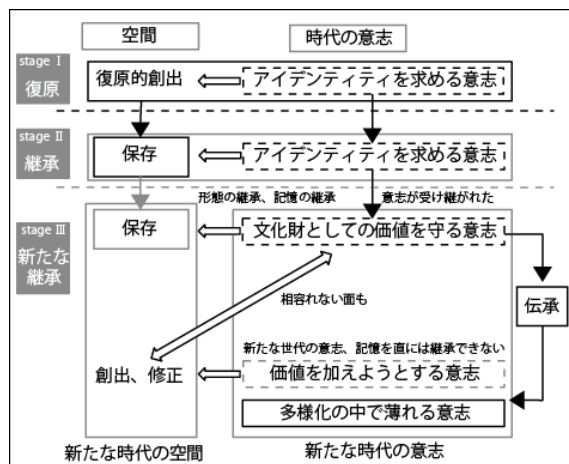


図-10 歴史の継承における空間と時代の意志の変化

9. 今後の歴史地区の継承に必要な視点

今後の歴史地区の継承に必要な視点であると同時に、ワルシャワから学ぶことのできる視点として、以下の3つが挙げられる。

(1) 変化する意志を貫く

図-10で示したように時代の意志が変わる中で、どの時代でも一貫した市民の生き様が重要である。むしろそれが継承の根拠になっている。負の遺産でありながら賑やかな文化的空間である現在の歴史地区に表れている、屈することなく自らの文化を発信していくその姿勢こそが重要である。

(2) 歴史を「点」ではなく「線」で捉える

必死に復原したものを次の時代に議論し、解釈し、継承してきた。時間軸において、過去と今を点と点で結ぶのではなく、それまでの軌跡を線で捉え将来を見つめる視点によりうまく継承されてきたと言え、今後も必要な視点である。

(3) グローバルな財産におけるローカルな視点

世界遺産であるワルシャワ歴史地区は、世界で共有される財産であるが、その視点にとらわれず、あえて世界を意識しないローカルなものの方、その場に宿る信念を貫く

独自の試みが今後重要となるであろう。戦後すぐのワルシャワにあったのは、まさにこの姿勢である。

【注釈】

- (1)海外における研究に関してはMarek Baranski (2006)¹²⁾に整理されている。
- (2)ワルシャワ工科大学建築学科のProf. Robert Kunkel へのヒアリングによる。ワルシャワ工科大学には実際に作成された図面計3万点が保管されている。
- (3)戦後打ち出された「ワルシャワ復興6カ年計画」¹³⁾、Adolf Ciborowski (1964)¹⁴⁾の英訳版を参照して整理した。
- (4)Andrzej Lubiatowski(The Union of Polish Metropolises)へのヒアリングによる。
- (5)図-2の点線内、新市街、旧市街、クラコフスキエ・プシエドミエシチェ通りとノヴィ・シフィアト通り沿いの地域を歴史地区と呼ぶことにする。
- (6)記述したいいくつかのデザインの特徴は、Jan Zachwatwicz et al (1956)⁶⁾掲載の図面から判断した他、Włodzimierz Pela et al (2007)⁵⁾を参照して整理した。
- (7)Gazeta Wyborczaの記事を基にしたMunicipal Office of Urban Planning and Strategy of DevelopmentのMSc. arch. Wojciech Oleniskiの解説を参照した。
- (8)現在の歴史地区をめぐる動きに関しては、MSc. arch. Wojciech Oleniskiと、文化財保全局のDr. Karol Guttmejerへのヒアリングを基に整理した。

【参考文献】

- 1)石丸紀典、松田修司 (1993)、「ワルシャワの戦災復興に関する研究 世界の戦災都市と戦災復興計画に関する研究その6」日本建築学会中国支部研究報告書9、pp.185-188
- 2)石丸紀典 (1993)、「ワルシャワ市街地における建物復興に関する研究 世界の戦災都市と戦災復興計画に関する研究その8」日本建築学会大会学術講演梗概集F、pp.17-18
- 3)田中傑 (2007)、「中央都市における戦災復興 そのコンセプト、プロセス、実態」復興コミュニティ論入門、弘文堂、pp.196-207
- 4)アンソニー・M・タン (2006)、「歴史都市の破壊と保全・再生 - 世界のメトロポリスに見る景観保全のまちづくり」海路書院
- 5)Włodzimierz Pela, Andrzej Sołtan et al (2007), "Warsaw's Old Town - a Monument to World Cultural Heritage", The Historical Museum of Warsaw
- 6)Jan Zachwatwicz et al (1956), "STARE MIASTO W WARSZAWIE ODBUDOWA", WYDANICTWO BUDOWNICTWA I ARCHITEKTURA
- 7)内田晃、有馬隆文、趙世晨、萩島哲 (2008)、「ペロットが描いたワルシャワの風景画の構図と市街地修復過程に関する考察」都市・建築学研究(14)、九州大学大学院人間環境学研究院、p16
- 8)Andrzej Tomaszewski(2006) ,"Conference Summary : A Reconstruction is not a copy", destroyed but not lost, Conservator of Monuments of Capital City of Warsaw, pp.273-276
- 9)ICOMOS "INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES / Paris, 7 June 1978"
- 10)UNESCO "State of Conservation of World Heritage Properties in Europe SECTION II / POLAND Historic Centre of Warsaw"
- 11)Municipal Planning Institution Office of Architecture and Spacial Planning (2007), "The Spatial Policy of Warsaw"
- 12)Marek Baranski (2006) ,"Foreign Views on the Reconstruction", destroyed but not lost, Conservator of Monuments of Capital City of Warsaw, pp.129-135
- 13)Bolesław Biurut (1950) ,"Sześcioletni Plan Odbudowy Warszawy", KSIAŻKA I WIEDZA
- 14) Adolf Ciborowski (1964), "Warszawa -o zniszczeniu i odbudowie miasta", Polonia